

# 都市幼児の健康・安全行動の形成と居住環境に関する調査

斎藤 歎能 (横浜国立大学)  
高城義太郎, 荻須 隆雄 (玉川大学)  
高野 陽, 松本 恭治 (国立公衆衛生院)  
松波 昭夫 (松波小児科医院)

## 1. はじめに

都市幼児の生活環境は、住宅の狭小化・建築物の高層化・遊び場の減少・交通量の増加など、多くの変容がみられるにも関わらず、これらの現状において、母親の幼児保健増進に関する考えについての十分な情報があるとはいえない。そこで、今回の研究においては幼児の生活環境に視点をおき、住居形態や居住階数とそこに住む幼児の健康安全行動や母親の働きかけとの関連について調査した。

## 2. 調査対象および方法

調査対象は、東京都内、神奈川県内の都市に住む5歳児を持つ母親約千名に、幼稚園、保育所を介して調査票を配布・回収した。なお、今回の報告は、その内の東京都下町地域2園、東京都山手地域1園、神奈川県下の田園都市地域1園、計4園507名についての調査結果である。

調査内容としては、幼児の健康の実態、現在の住居の状況、居住階数、自宅付近の環境、交通量、幼児のふだんの遊び方、友達の有無、親子一緒にの運動、幼児と遊ぶ時の母の態度、またその時の母親の気持ちなどの項目からなり、それぞれの項目を住居形態別、および階数別に比較した。

## 3. 結果および考察

### (i) 怪我と居住階数との関係について

幼児の居住階数と医療を要した怪我の有無との関係について調べた。図1に示すように、1階に比べて2階以上に住む幼児では、怪我を経験したものの割合が多い ( $p < 0.025$ )。すなわち、1階に住んでいる幼児で怪我をしたものは、32.4%であるのに対し、5階以上に住む幼児では、44.8%となっている。

これについては、さまざまな要因があると考えられるが、高層になるほど、母と子が一緒に遊ぶ機会が少ないという結果も得られており、幼児の危険な遊びに対して、適切な指示ができないということも考えられる。また、高層であるほど、幼児自身も戸外遊びの経験が少なく、危険回避が拙劣であると推察される。

### (ii) 居住階数と幼児と遊ぶ時の母の態度

居住階数と幼児と遊ぶ時の母親の態度との関係を見ると、一般に、母親は「短時間でも集中的に」幼児と遊ぼうと心がけているが、図2にみられるように、「テレビを見ながら」とか、「新聞を読みながら」といった、ながら的な遊び方をする母親もみられる。このながら的な遊び方をする母親は、1階よりも、高層に住んでいる母親に多くみられ、特に、4階に住んでいる母親に有意に多くみられた ( $p < 0.005$ )。また4階に住む母親は、幼児と遊ぶ時、「面倒だ」とか「イライラする」と感じる割合が最も多く、楽しみや充実感を味わっているものが、他の居住階数の母親よりも少ない。これらのことから、4階に住む母親は幼児と戸外遊びをする機会が少ないのではないかと考えられる。

### (iii) 住居形態と幼児の遊び場所について

住居形態と幼児が安心して遊べる場所の有無については、幼児が戸外で安心して遊べる場所があると答えたのは、公団・公社や社宅などに住んでいる幼児に多く、一戸建住宅・木造民間アパート・借間に住むものは、それに比べて少なくなっている ( $p < 0.05$ )。また、図3に示すように、一戸建住宅に住む幼児では、道路で遊んでいるものが、39.5%にも達しており、他の住居形態の幼児に比べ、公園・広場で遊ぶものが少なくなっている。それに対し、公団

・ 公団などの住居に住む幼児は、その専用の庭で遊んでいるものが多く、公園や広場で遊ぶ割合も最も高くなっており、児童館の利用度も高い。このことは、自宅のすぐ側に、遊び場があるものの方が、母親の安心感が高くなっているといえる。

(iv) 住居形態とふだんの遊び方について

図4に示すように、「ほとんど家の外で遊ぶ」と答えた幼児では、公園・公団などに住むものが最も多く、「どちらかといえば家の外で遊ぶ」と答えたものを合わせると、45.3%となり、積極的に戸外遊びをしている姿がみられる。また、一戸建住居やマンションに住む幼児は、「どちらかといえば家の中で遊ぶ」と答えたものが、他の住居形態のものに比べて多く、特に、マンションに住む幼児は、「どちらかといえば家の中」、「ほとんど家の中」で遊ぶと答えたものが26.5%にみられた。これは、先程の遊び場と関連して、安全な遊び場が近くにある方が、戸外遊びの機会を積極的に持っているものと考えられる。また、公団・公団などに住む母親が、幼児を一人ですす時の気持ちとして「安心して出す」と答えたものが多く、母親の気持ちの安定も戸外遊びを積極的に助長しているものと思われる。

(v) 住居形態と幼児と遊ぶ時の母の態度

図5のように、「短時間でも集中的に」幼児と遊ぶ

母親が多いが、ながら的に遊ぶものもみられ、特に、借間住いでは、「テレビをみながら」遊ぶと答えたものが、26.7%もみられた。また、日頃の幼児との遊び方については、ほとんどの母親は、遊び相手を「よくする」、「ときどきする」と答えているが、「ほとんどしない」と答えたものも約1割あり、その中では、公団・公団などやマンションに住むものが比較的、高い割合を示し、居住階数との関連が強いのではないかとと思われる。

4. 結 論

以上、幼児も母親も住環境の影響を強く受けている。特に、居住階数と母子の接し方・養育態度では、高層、中でも4階あたりに住む母親に若干、問題がみられ、階数によって母親の行動範囲がせばまっているように思われる。またそのことが、幼児自身の行動にも影響し、高層に住む幼児の方が、怪我の割合が高いことにも関連していると思われる。また、遊び場については、地域全体で考えるべきことではあるが、自宅の近くに遊び場がある方が、母親の安心感が強く、これが幼児の戸外遊びをより助長している形をとっているのではないかとと思われる。つまり、母親自身が安心感を持てる生活環境・地域が、幼児の健康・安全行動を形成する上で、不可欠なものであるといえる。

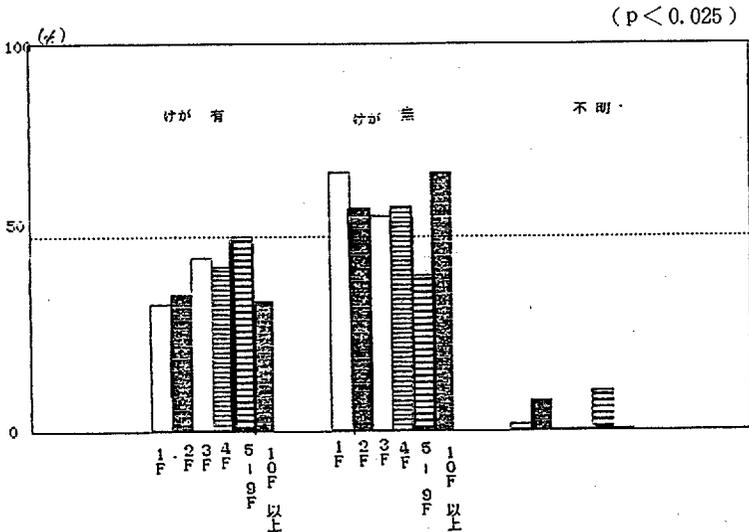


図1 けがの有無 X 階数

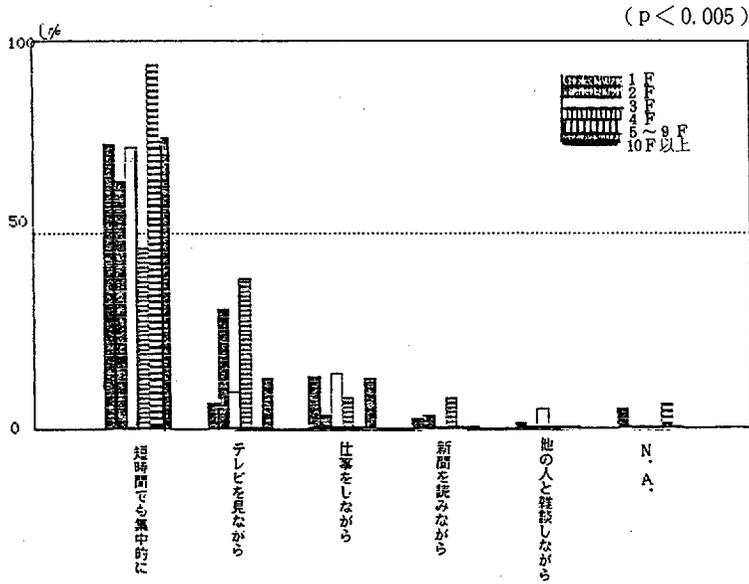


図2 階級 X 母親がどのように子どもと遊び相手になるか

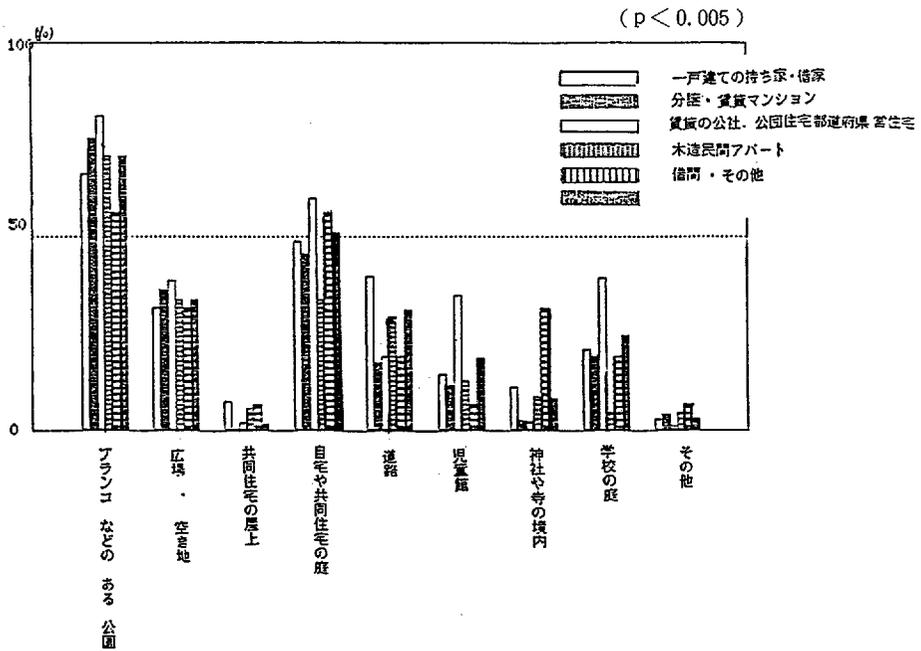


図3 住居形態 X 家の外でよく遊ぶ場所

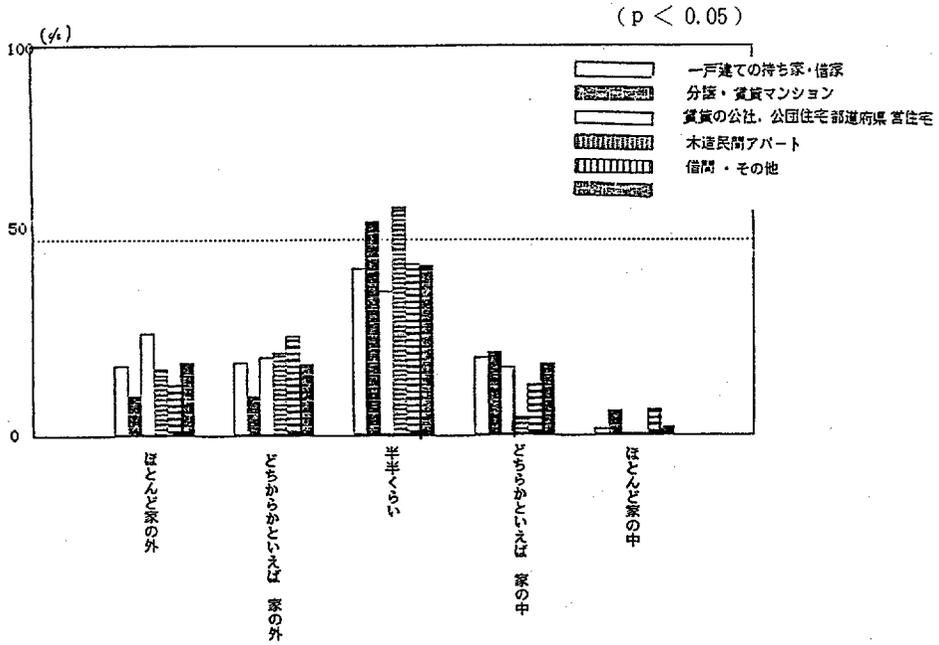


図4 住居形態 X ふだんの遊び方

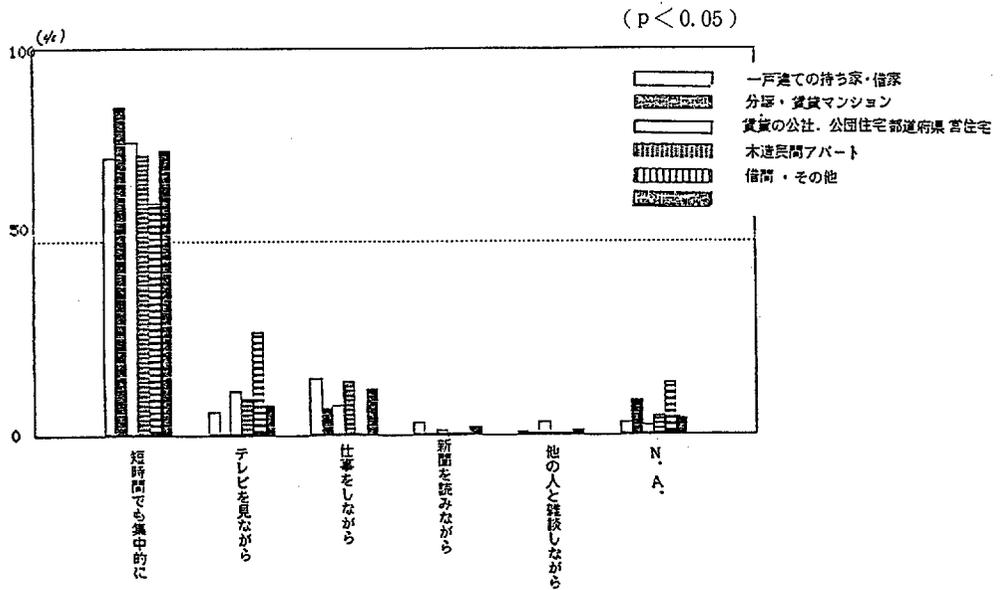
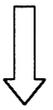


図5 住居形態 X どのように子どもと遊び相手になるか



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



## 1.はじめに

都市幼児の生活環境は、住宅の狭小化・建築物の高層化・遊び場の減少・交通量の増加など、多くの変容がみられるにも関わらず、これらの現状において、母親の幼児保健増進に関する考えについての十分な情報があるとはいえない。そこで、今回の研究においては幼児の生活環境に視点をおき、住居形態や居住階数とそこに住む幼児の健康安全行動や母親の働きかけとの関連について調査した。